

ました。

そのつぎの日からは、お月様が留守になりましたけれど、久美ちゃんはお月様にいただいた玉をもつて、お池の傍に立つてゐますと、そこら中が明るくて、お月様がいらつしやる時と同じやうになりました。久美ちゃんも可愛い聲で楽しさうに、毎晩『お月様いくつ』を歌つてゐます。もう蓮の花も近い中に開きさうになりました。

歌ひませう

露子ちゃんは夕方になると、きつと大きな庭下駄を引きずりながら、丈より高い草の繁つた裏庭へ出かけてまゐります。

『うーさぎうさぎ、何見てはねる、十五夜お月さま見てはあねる。』

御祖母様が露子ちゃんをお膝の上に抱つこしては歌つて聞かせて下さいませので、露子ちゃんもすつかり覚えてしまひました。それを可愛い声で歌ひながら、ピョン、ピョンと跳ねる真似をして、叢の中を歩き廻りますと、薄や荳の葉末にとまつてゐる露が、コロ／＼とこるげだして、

『露子ちゃん、私たちのお友達の露子ちゃん、一緒に遊んで下さいな。』

と、水晶のやうな細いきれいな顔で、露子ちゃんのネルの着物だの、紅い帯だのにつかまつて頼むのですけれど、その聲があんまり小さいので、露子ちゃんにはちつとも聞えませんでした。それよりも赤まんまだの水引草だの、下から、鈴をふるやうな聲で、

『私の好きな露子ちゃん、お歌をうたつて遊びませう、みんなと一緒に踊りませう。』

と、鈴蟲に松蟲にくつわ蟲なんぞが、髭を立てながら、露子ちゃんの歌に合はせて、

『コロ／＼、コロ／＼、スキツチヨ、スキツチヨ。』

と、合奏する方が面白いのでした。その時は露子ちゃんも、知つてゐるだけ

の唱歌だの、一つとやゝだの、お月様いくつ十三七ツだの、あらひざらひ歌つてしまふのでした。

或る晩なんぞは、まんまるいお月さままで、にこ／＼しながらお聞きになつていらつしやるし、大きい柿の木も、栗の木も、檜の木も、みんな葉の音一つたてないで、熱心に聞いてゐますので、露子ちゃんはもう嬉しさのあまり夢中になつて、あらん限りの聲で歌つてゐました。

すると、いろ／＼な蟲も踊つたり歌つたりしてゐたのが、急にハタと黙つて、コソ／＼と草の中に駆けこんでしまひました。お月さまも同じやうに、曇つたお顔をして影をかくすと、いやな黒い雲ばかりが大入道のやうに下界をにらんで居りました。

露子ちゃんは、どうしたとかとびつくりして、今までの元氣もなく、すぐごとお家へ歸らうとしますと、おとなしかつた木の葉も、心配そうにザワ／＼と騒ぎはじめたと思ふ間もなく、ピカツと電光りがして、ゴロ／＼と雷さまが鳴り出しました。

『露子ちゃん大變ですよ、はやくお家へ歸りなさい、さやうなら、さやうなら、また明日の晩いらつしやいよ。』

どこかで斯ういふ聲が聞えたと思ふと、バラ／＼と大粒の雨がふり出して来て、露子ちゃんはお家へ歸ることも出来ないほど、大降りになつてしまひました。

『お母ちゃん、お母ちゃん。』

と、大きな聲で呼んで見ましたけれど、凄^{すこ}い雷の聲のために、ちつとも聞えませんので、お家からは何の返事もありませんでした。

『お母ちゃん、あーん、あーん、お母ちゃん。』

と、露子ちゃんはとう／＼泣き出してしまひました。そこへお母さんも心配して、探しに来て下さいましたので、やうやく家へ歸ることが出来ました。それから當分、露子ちゃんは遊びに出ませんでした。またこの頃では毎晩のやうに行くやうになりました。

ところが、この二三日急に寒くなりましたので、どうしたわけか、夏からつひ先頃まで元氣に歌つてゐた蟲たちが、細い哀れな聲で、

『露子ちゃん、もう私たちはお別れですよ、歌ひたくつても聲が出なくなり

ました。こんなに痩せたのを見て下さい。』
 『あの元氣なくつわ蟲さんは、とう／＼昨夜死んでしまつたのですよ。私
 ちも長くはゐられませぬ。露子ちゃん、もうぢきお別れなんですよ。』
 片足折れた鈴蟲だの、しやがれツ聲になつた松蟲だのが、露子ちゃんの足
 許に來ては、悲しそらに斯ういひますので、

『どうしたの、誰かいぢめるの、私がそらいつて上げるから、この間中のや
 うに面白く歌つて頂戴な。』
 と、露子ちゃんがいひますと、

『いゝえ、私たちは斯う寒くなると、食べものもないし、息もつけないやう
 になりますから、どうにも仕様がありません、今夜にもあの眞白い霜でも來

ようものなら、生きてはゐられないのです。露子ちゃん、あなたはいつまで
 も上手に歌つて下さいよ。』
 と、苦しうに言つて、歌も歌はないで、すご／＼と自分たちの家へ歸つて
 ゆきました。

それから、毎晩賑やかだつた蟲の音樂も聞えなくなりまして、草の根元
 に哀れな様に死んでゐるのを、露子ちゃんが見つけました。而してそれをあ
 つめて、お庭の隅の木が澤山ある暖かさうな處へ埋めてやりました。

急に淋しくなつた裏庭では、露の玉ばかりがキラキラして、露子ちゃんの
 來るのを待つてゐました。露子ちゃんは蟲にお約束した通り、相かはらず歌
 ひますけれど、それは低いさびしい聲でした。

な さ け

『今度の日曜に、盛岡の町で馬の市があるさうだよ、家のアヤメ(馬の名)を賣つてしまはうかと思ふが、どうだらう。事によつたら善い値に賣れるかも知れないぜ。』

『あら、さうでございませうか、アヤメも随分老年になりましたからねえ。』

『さうさ、もうあんなに老いぼれちやア、一向役に立たないからねえ。』
と、或る晩、お父様とお母様とが話し合つていらつしやいました。

日ごろ馬好きの秋ちやんは、そのお話を聞いて、

『お父様、アヤメを賣るのはお止しなさいよ、可哀さうだから。』

と申しました。

『可哀さうだつて仕方がないぢやないか、あれはもう老年だからね、あれを賣つて、今度はもつと若い元氣の好いのを買ふのさ。』

と、お父様は平氣な顔をしていらつしやいます。

『でも可哀さうだわ、老年になつたから賣るなんて、お父様、後生だから賣らずにおいて頂だいな、私、アヤメは好きなんですもの。』

秋ちやんは斯う言つて、心ぼそさうにお父様の顔を見つめました。

『お前はそんなことを言ふが、今度もつと元氣の好い馬を買つてごらん、さつとその方が好きになるよ、ね、あんな老いぼれ馬は、早く賣つてしまふ方が好いのさ。』

『だつて私、アヤメは可哀さうだわ、お父様、賣らずにおいて頂だいよ。』
 『まあ好い、お前がそんなこと心配しなくツても好いさ、早くお寢み。』
 と言はれるので、秋ちゃんは仕方なしに黙つて自分の室へ参りました。
 翌くる朝、秋ちゃんは早く起きて、アヤメに秣をやつたり、水を飲ませたりしました。而して、小さな優しい掌で鬢のところを撫でてやりながら、
 『アヤメや、お前も賣られるかも知れないんだよ、今度の日曜に馬市があるんだつて、お父様はお前を賣るツて言つてらしてよ。でも私、お前を賣るのは可哀さうだと思ふわ、ながい間家にゐたんだもの、ねえアヤメ！』
 と、まるでお友だちに話しかけるやうに申しました。馬もそのやさしい言葉が解つたのか、首を垂れたまゝ、ぢつと聞いてゐました。

秋ちゃんは、アヤメの素直な様子を見ますと、なほさら可哀さうでたまりません。その後毎日、アヤメのことばかりを心配してゐました。けれどもお父様は、やつぱり賣つてしまふつもりらしいのです。
 二日と暮れ三日と過ぎて、いよ／＼明後日は日曜といふ日になりました。今にも雪の降りさうな寒い／＼日で、秋ちゃんが學校から歸つて來ますと、家の中は何だかひつそりとしてゐます。お母様は待ちかねてゐたと言はぬばかりに、奥のお座敷から出て來て、
 『秋ちゃん、今日はね、お父様が悪いんだよ、急に持病の腹痛が起つたの。今朝からいろ／＼氣を揉んでゐるんだけど、あいにくお薬はなくなつてゐるし、お使ひに行くものはないし、ほんとにお母様はどうしようかと思つて』

「わたんだよ。」

と、心配さうに仰ッしやる。秋ちゃんは何と言つてよいのか解らないので、たゞお母様の顔を見つめるばかりでした。

するとお母様は、また言葉をついて、

『だから秋ちゃん、お前お氣の毒だけれど、大急ぎで町までお薬を買ひに行つて来て頂だいな、ね、いつもの通りだから、知つてゐてせう。』

『え、私行つて来ますわ。』

『ぢやアね、もう遅いから、あの馬に乗つてお出で。途中よく氣をつけてね。』

『馬に乗つて行きや、日が暮れても大丈夫よ。』

秋ちゃんは、書物包みとお辨當の袋とをそこにおいて、大急ぎで厩からア

ヤメを引き出して鞍を置きました。朝から雪模様の空がますます怪しくなつて、今にも何か降り出しさうな天氣。おまけに町までは、二里餘もある田舎道なのです。

それでも秋ちゃんは、ひらりとアヤメに打ち乗り、一鞭あてゝ家を出ました。アヤメはよく秋ちゃんに馴染んで居りますから、すなほに町への道を進んで行きました。

町に着いて、いつもの薬屋で薬を買ひ、さてこれから歸らうとする時、あたりは薄ぐらくなつて、ちら／＼と雪が降り出しました。町をはなれて田舎道にさしかゝりますと、雪は次第に降りつもあり、風さへ吹きすすんで、行く手も見えなくなりました。

『まあこんなに降つて来て、困るわねえアヤメ。でもお前、道を間違へないやうに行つとくれ、私心配だから。』

と、秋ちゃんは馬をたよりに、身を切るやうな寒さを我慢して、さびしい不安心な道を右に左に辿りました。が、何しろ日は暮れて居りますし、雪は眞正面から吹きつけますので、やゝもすれば道を踏み迷ひさう、それはく困難を致しました。

やうやく家に歸りついた時、あんまり遅いので、お母様は門口に立つて待つていらつしやいました。コト／＼と馬の歩く音が近く聞えると、お母さんは、

『秋ちゃん、秋ちゃんかえ。』

と、お呼びになりました。

『お母様、こんなに雪が降つて、ほんとに困りましたわ、でもアヤメがよく道を知つてゐましたから。…お母様、アヤメは可哀さうですわ。』
と、秋ちゃんは何故ともなく熱い涙をこぼしました。

* * *
お薬のお蔭で、お父様の病氣はまもなく治りました。

雪の降る日にお薬を買つて来て、お父様の持病をなほすことが出来たのは、全くアヤメがよく秋ちゃんの言ふことを聞いたからです。それでお父様も、もうアヤメは賣らずに、いつまでも勞はつて養つてやることにしました。

歸り途

それは冬の寒い日でした。清子さんは花江さんと静代さんと、三人連れ立って學校から歸りました。

花江さんは銘仙の着物の上に、白毛のついた茶羅紗のマントを暖かさうに着て、きれいな帽子を冠つてゐます。痩せぎすな顔色の白い少女なので、見たところ、いかにも可愛らしくて美しくございます。

静代さんは紫紺地に白レースの縁を取つた洋服を着て、柔らかな靴をはき、頭には花江さんと同じやうな帽子を冠つてゐます。一體に沈みがちな性質なので、いき／＼とした風采をしてゐるのにも似ず、どこか淋しい面影があり



ます。

清子さんだけは、双子の着物に飛白の羽織を着て、しよんぼりとして居ります。

それでも三人は同じやうに肩をならべて、何か楽しげにお話をしながら、賑やかな町を通り過ぎました。

『今日は随分寒いね。』
と、弱々しい花江さんが申しました。

『でも貴女は、マントを着ていらッしやるから好いでせう、洋服はほんとに寒いことよ。私もお父様にお願ひして、マントを買つていただくわ。』
と、静代さんが花江さんのマントを見つめながら言ひました。清子さんは黙

つて二人の話をきいてゐました。

大通りを真直に行つて、今度は小さな路次を右に曲らうとする時、ふと花江さんは立ちどまつて、

『あら、私知らずにゐたわ、もうこゝでお別れよ。左様なら。』

と、軽くお辭儀をしました。

『私も其方から歸るわ、一しよに行きませうね……。ちやあ清子さん左様なら、また明日ね……。』

と、静代さんも立ちとまりました。

『あなたも其方から。私一人になるのね。』

と、清子さんはつまらなさうな顔をしましたが、仕方がないので、

『ちやアこゝで左様なら。』

と、別れの挨拶をいたしました。

『左様なら！』と言ひ捨て、花江さんと静代さんとは小路を右に行つてしまひました。

清子さんは寒い風の吹く四辻に、暫らく立ちとまつて、二人の後姿を見送りしました。而して、花江さんも静代さんも立派な着物を着て、あんなに暖かさうにしていらつしやるのに、自分だけは家が貧しいため、こんな服装をして、ほんとに恥かしいと思ひました。着物ばかりでは無い、花江さんや静代さんは、何でも善い物を持つていらつしやる、お金のある方は羨ましい、家にもお金があると好いけれど……。こんなことを考へながら、清子さんはぼ

んやりとしてゐました。すると、

『清子さん、何を見ていらっしやるの?』

と、だしぬけに後から聲をかけたものがあります。清さんは夢からさめたやうに、びつくりして振り返りました。見れば、高橋先生がそこに立つていらっしやいました。高橋先生は清さんたちの級の受持で、やさしい女の先生、いま學校からお歸りになる所なのでした。

清さんは、あわてゝお辭儀をしました。先生はにつこりと笑みを浮かべながら、

『寒いぢやありませんか、さあ早く歸りませう。花江さんや静代さんはどうなすつたの?』

と仰つしやるので、清さんは顔をあげて、

『今こゝで別れましたの。あれ、もうあんな所まで行らっしやいましたわ。』と、遠く二人の後姿を指しました。

『あゝ、あれがさうですか、花江さんもお氣の毒ですねえ、可愛らしいお方だけれど、あんなにお弱くツちやあ困りますわ。この寒さで、また悪くおならなければ好いが……』

と、ひとり言のやうに仰つしやる。清さんはそれを聞いて、日ごろ花江さんが病身なことを思ひ出しました。たつた今まで、暖かさうなマントを羨ましがつて居りましたけれども、病氣のことを思ひ出しますと、却つてあの美しい姿が、氣の毒になりました。

『花江さんはあんなにお弱いし、静代さんはお母様がいらッしやらないし、お二人ともお可哀さうですぬえ……。清子さんは何處も悪くなくて、ほんとに御幸福ですぬ。』

と、先生は振り返つて、清子さんの顔を御覽になりました。

清子さんは『え、』と答へた限り、黙つて居りましたけれど、心の中ではまだ自分の家の貧しいことを恥かしく思つてゐました。

その日、學校から歸つて清子さんは、花江さんと静代さんとのことを、それからそれへと思ひつゞけました。

いくらお金があつても、身體が弱かつたら、どんなに心細いことだらう。

たとひ立派な洋服を着ても、それを喜んで下さるお母様がなかつたら、どんなに寂しいことだらう。……さう思ふと清子さんは、身體も健やかで、やさしい両親の揃つてある自分を、幸福な身分だと喜ばずにはゐられませんして。

薬とり

上

おていちゃんは、今年十二になる盲目の女の子です。家は或る町はづれの裏長屋で、年をとつたお母さんと二人、淋しく暮してゐるのです。

この頃のやうな霜の深くありた月の好い晩は、きつと細い杖をつきながら小さな痩せた影を地に曳いて、いそ／＼と何處かへ出てゆく姿が見えます。而して大抵な家では、もう暖かい夢を見てゐる時分に、寒さうに身をちぢめながら歸つてまゐります。家では薄暗いランプが、破れた畳や煤だらけの障

子を哀れげに照らして、片隅に寝てゐるお母さんの顔が青白く見えます。

今夜もおていちゃんは歸つてくると、そつと雨戸を開けて、足の先でさぐり／＼杖を土間において、何にもつまづかないやうに上つてきて、いつものやうにお母さんの寝ていらつしやる傍へいつて、耳を傾けてその寝いさを聞いてをりました。お母さんはそれで目がさめたのでせう、大儀さうにこつちを向いて、

『おや、いつ歸つたの？ 外はさぞ寒かつたらうねえ、火鉢に火があるから、

よく暖まつて早くおねよ、お前もつかれるといけないからね。』

病に痩せた手を出して、おていちゃんの冷たい手を握り、

『今夜はどうだつたえ、また犬に吠えられやしなかつたかえ？……』

『いしえ、もうこのごろは馴れたから大丈夫よ、お母さん今夜はどんなだつたの？ 奥様からお菓子をいたゞいて来たから、お母さん一ツ喰べて御覽なさいな、私も一つ喰べたら、柔らかくつておいしいのよ。』
 おていちゃん、袂から半紙につゝんだ包みを出して、そこへひろげて、『さアお母さん、柔らかいから喰べられてよ。』
 と、自分のもらつて来たものを、しきりにすゝめますので、お母さんも、『さうかえ、それぢやア一ついたゞかうかねえ。……お前途中で誰かにいぢめられやしないかい、お母さんはね、かうやつて寝てゐるから、お前がほんとに可哀さうでね。』

ホツと吐息をつきながら、おていちゃんを見上げた目には、涙が光つてゐ

ました。けれど、おていちゃんには見えないので、

『お母さん、そんなに心配しちやあいやよ、山尾の旦那様も奥様も、いまにお前が大きくなつたら、立派に看板をかけさせてやるから、しつかりならへつていつて下すつたから、早く上手になつて、お母さんに澤山おいしいものを上げるわ、ねお母さん！ だから早く身體がよくなるといゝんだけれど……』
 と、見えない目をあげて、お母さんの様子を探らうと、ちつと耳をすませてをります。

『お前は本當にやさしくいつてくれて、お母さんはもう〜どんなにか嬉し

いだらう、私は石に抱きついて生きてゐたいよ。あたりまへの身體でもな

いお前まへをのこして、どうして死しなれるものかね、きつときつと快よくならなければねえ。……だけれど私わたしも年としが年としだから、お前まへがこんなによくしてくれても、とても見みこみはないかも知しれないよ、あゝ、お前まへは何なんといふ不ふ運うんな兒こなんだらうねえ。』

同おなじ年としごろの女をんなの兒こは、リボンや簪かんざしに氣きをとられてゐるのに、その色いろさへも知らずに、世よの中なかを狭せまくしてゐる上に、こんな苦く勞らうをさせるかと思おもふと、お母かあさんは身みをちぎられるよりも苦くるしい思おもひで、シヨンポリそこに座すはつてゐるおていちゃんを見みつめながら、涙なみだに曇くもつた聲こゑで斯かう言いひました。

『さア、もう遅おそいから、こんな話はなしはよして寝ねませうね、お前まへもお寝ねてないか？』

おていちゃんおていちゃんは、すなほに立たち上あがつて、手てさぐりに薄うすい蒲ふとん團だんを出だして、母ははと並ならんで枕まくらにつきました。

下

おていちゃんおていちゃんは、お母かあさんが病びやう氣きになつてからは、不ふ自じ由ゆうな身みで臺だい所どころのこことをしたり、お母かあさんのお藥くすりをとりにつたりして、一しやう生けん懸めい命いに看かん護ごをして、夕ゆふ方がたから、わが身みの上うへに同どう情じやうをよせて呼よんでくれる家うちへと、一り里あま餘まりの道みちを通かよつて行ゆきます。而そして歸かへりにはお母かあさんの病びやう氣きが一日いちにちも早はやく快よくなるやうにと、觀くわん音おん様さまへお參まゐりをしてくるのです。

一日いちにち々く々と寒さむさの募つるにつれて、お母かあさんの病びやう氣きも思おもはしくないので、お

ていちやんの心配は一通りてなく、お母さんが静かに寝ていらつしやると、
 どうかしたのではないかと、そつと手を口のそばへやつて呼吸をはかつて見
 たり、目が見えないので、よけいに心をいためてをりました。
 今日けふは空模様そらもやうが悪く、寒ささむも殊ことにはげしいので、雪ゆきでも降ふらなければい、
 がといつてゐる人もある位、北風きたかぜがヒウ／＼吹ふいて、身みを切きられるやうに寒
 い日ひです。おていちやんは、お母さんのお薬くすりがないので、今いまの中に一寸ちよつとお醫
 者しやさまの處ところへいつて來こやうと思おもつて、
 『お母さん、私わたしこれからお醫者いしやさまの處ところへいつて來きますよ。炬燵こたつの火ひはまだあ
 るの？ 御湯おゆはよくわいてゐるやうよ。私わたしいつてきてもいゝてせう？』
 と、へすりよつて様子やうすを伺うかひました。

『さうかえ、あんまり寒いのに風邪かぜでも引ひくといけないから、明日あしたにしても
 いゝだらう、今いまに雪ゆきがふつてくるかも知しれないから。』
 『雪ゆきでも降ふると出でられなくなるから、今いまのうちに一寸ちよつといつて來きませう。』
 と、おていちやんは薬瓶くすりびんを懷ふところにに入れて立たち上ありました。
 『御苦勞ごくちらうだね、それぢやア氣きをつけていつて來きておくれよ……傘かさをもつてゆ
 く方がいゝだらう。』
 『え、それではいつて參まります。お母さん暖あつたかにしてゐらつしやいよ、私わたし
 はぢきにいつて來きますから。』
 と、さぐり／＼お母さんの寝ねていらつしやる蒲團ふとんの裾すそを、風かぜのはいらないや
 うによく押おへて、勝手かた知しつた土間どまに下おりて、傘かさと杖つゑを兩手りやうてに持もつて出でてゆき

ました。

外は砂を捲いて吹く風が、身をさるやうに冷めたいので、身をすぼめながら、杖をたよりに、お医者様からお薬を戴いて歸りかけました。

おていちゃんの家から二三丁離れた處の原では、男の兒が七八人で遊んでをりましたが、おていちゃんが急いで歸つてくる姿を見つけて、その中の大きい兒が、こそく何かいつてゐました。おていちゃんは、そんなことは知らずに歩いて來ますと、不意に横から一人の男の兒がきて、持つてゐる杖をぐいと引きました。おていちゃんはよろしくして、

『あれーッ、誰、そんなことをするのは、……』
と、さげばました。

『やい、ちび按摩、こゝは通さないぞ。』

と、他の男の兒が、おていちゃんの前に立ちふさがつて威しますと、

『ア、いゝことがある、斯うしてやるんだ。』

と、大きい兒は、いきなりおていちゃんをつかまへて、

『もつとこつちへこい！ おい、皆でどうぐめぐりをさせてやらうよ。』

纖弱いおていちゃんは、大勢の男の兒につかまへられて、いくら身をもだえても、どうすることも出來ません。そのうちに、男の兒はわいぐ云ひながら、無理やりに原の真中まで連れて來て、おていちゃんをぐるぐるとりまいて、

『どうぐめぐり、どうめぐり！』

と、口々にさげびながら、おていちゃんの身體をぐる／＼目の廻るほど廻しておいて、ぐいと突きとばしましたので、おていちゃんは、どつとそこへ打倒れました。それを見て、

『やゝい、盲目んぼう！ お前の家はどつち。』

と、はやしたてます。

おていちゃんは口惜しくて、悲しくて、そのまゝわつと泣きだしました。

『盲目が泣いた、僕ア知らないツ。』

といつて、一人が遠くへゆきますと、ぞろ／＼と皆行つてしまひました。さつき突き飛ばされた時に、杖も傘も大事にしてゐた薬瓶も、どこへかなくしてしまひましたので、おていちゃんは、ふら／＼する身體をやつと起して、

そこらを手さぐりに尋ねましたけれども、さつぱりわかりません。て、暫らく途方にくれて、そこに佇んでゐました。

『あゝ、こんなに遅くなつて、さぞお母さんが心配していらッしやることだらう！ どうしたらいいか知らん、お薬も杖もなくしてしまつて、家へ歸られなくなつてしまつた。』

曇つた冬の日で、あたりは眞暗になるし、寒さは身にせまるし、さつきから催してゐた雪は、ちらほら降り初めて、おていちゃんの亂れた頭や着物に白くふりかゝりました。堪らなくなつてシクシクと泣いてゐたおていちゃんは、遠くに足音のするのを聞きつけて、おつと耳をすませてをりましたが、キツと顔をふりあげて、其方を窺ひました。

『あの……何誰ですか、お願いですから私を連れていつてくださいなア！』
と、大きな聲で救をもとめました。するとそれが聞えたのでせう、足音は次第に近づいてまゐりました。おていちゃんは嬉しさに、
『こゝですよう！』

と、また聲をかけながら、そろ／＼と足音のする方に歩みよりました。

『まア、おていちゃんぢやアないかえ、今時分どうしたといふの？』

こゝに來たのは、幸ひ近所の人でしたから、おていちゃんは生き返つたやうに喜んで、今までの事を委しく話しました。その人は大變氣の毒がりました、親切にもそこらをさがして、杖だの傘だのを拾つてくれました。が、折角の薬瓶は、みぢんにこわれてをりました。

その人に家の傍まで送つてもらつたおていちゃんは、厚く御禮をいつて別れ、さぞお母さんが待ちつかれて居られることだらうと、原で倒された時の痛みも忘れて、急ぎ我が家へ歸りました。
門口を引きあけて、杖をそこに抛り出したまゝ、勝手知つた部屋にかけあがり、

『お母さん！』

と、一聲叫びましたが、お母さんは返事はなくて、静かな闇の中には冷たい空氣がたゞようてゐるばかりでした。

外には、ふりしきる雪がさら／＼と、風に交つてさゝやいてをります。

道づれ

もう二つ寝るとお正月といふ日の暮れ方、小枝子は福引のリボンや密柑を買つて、嬉しさうに家路に向ひました。

どこの家にも、いかめしい門松が立てられて、市街は何だか改まつたやう。往き來の人々も、忙しさうな足どりです。

『あの、澁谷へ行くのは、これ行つて好いんですか。』

と、人ごみの中から、思ひがけなく聞き慣れぬ聲がしました。振り返つて見ますと、十一二歳の男の兒が、何やら大きな風呂敷包みを背負つて、この寒いの足袋も穿かず、帽子も冠らず、心配さうな顔をして小枝子の傍に立つ

てゐました。

お店の小僧さんにしては、あまり身體が小さい、お歳暮に行くとしては、どうも背中の風呂敷包みが大き過ぎる、たつた一人て道に迷つたのか知らずと、小枝子がちつとその顔を見て居りますと、男の兒はまた一足小枝子の方へ寄つて来て、

『澁谷へ行くのは、この道で好いんですか。』

と尋ねました。

『え、これ真直に行けば好いのよ。でも澁谷は廣いから、澁谷の何處なの？』

『下澁谷です、番地はこゝに書いてあるんです。』

と言ひながら、懐中から紙片を取り出して見せました。小枝子はその番地と名前とを讀んで見て、

『あゝ、これならこの道を行つて、左に曲れば好いのよ。私もその近所まで歸るんだから、一緒に行きませう、ね。』

と言ふと、男の兒は急に力を得たやうに喜んで、

『ぢやア連れてつて下さいな。僕もう困つてしまつたの。』
と、小枝子の後について歩きながら、

『澁谷ツて随分遠いんですね。』

と申しました。小枝子はそのいたいけな様子を見て、
『もうぢきよ。こゝからそんなに遠くはないわ。』

と、親切に慰めました。

『さうですか、僕もう足が痛くなつてしまつた。』

『何處から來たの？』

『深川から來たんです。』

『まあ、深川から、……電車にも乗らずに、大變ねえ。』

『道が解らないんだもの、なほ困つてしまつた。』

と言ひますので、小枝子は可哀さうに思つて、

『深川からなら随分遠いわ。そんな大きな荷物をもつて、よくそれで歩けることねえ。』

と、その様子をつくづくと見返しながら申しました。

『姉さんが待つてゐるだらうと思つて、一生懸命に歩いたんです。』
 『あら、姉さんの所へ行くの。』
 『え、姉さんが澁谷にゐるんです。去年から一度も遇はないんだから、姉さんもきつと待つてゐてせう。』

『ぢやア姉さんは、御奉公でもしていらッしやるの。』

『い、え、奉公ッていふ譯ぢやアないんです。』

『それぢやア、お嫁に行らしたの。』

『いやだッ、まだ十四だもの、お嫁になんか行きやアしない。』

こんな話をしながら、阪を上つて左に曲らうとしますと、ちやうど向ふの横町から、身なりの貧しい一人の少女が、お使ひにでも行つたのか、片手に

小さな包みを持つて出て來ました。と思ふと、此方の男の兒は目早くそれを見つけて、

『やあ姉さん、姉さんだッ、姉さんだらう。』

と、馳せ寄りました。少女は思ひがけないことなので、しばらくは驚いたやうに見つめて居りましたが、

『あら、龍ちゃん！……まあよく來たのねえ。』

と、なつかしげにその肩に手をかけました。

小枝子はこの様子を見て、少女が男の兒の姉さんであることを覺りました。而して、何處かその少女の顔に見覚えがあるので、

『まあ、初子さんぢやないの。』

と、傍から尋ねて見ました。初子と呼ばれた少女は、

『あら、小枝子さん。』

と、思はず大聲を立て、さまりわるさうに頭を下げました。

『姉さん、知つてるの？ 今ね、僕この方と一しよに來たんだよ。道がわからないんだもの、教へてもらったの。』

と、龍ちゃんは無邪氣に物語りました。

『まあさう、よかつたわねえ。小枝子さん、どうも有りがたう。』

『いゝえ、私ね、あなたの弟さんてことは、ちつとも知らなかつたの。たゞね、澁谷の姉さんの所へ行くんだって仰ッしやるのよ、だから一しよにお話しながら來たの。』

と、小枝子は途すがらの思ひがけなき面會の譯を話してきかせました。

小枝子と初子とは、同じ學校へ行つて居るお友だちなのです。學校では、

初子は何時も寂しさうに、たつた一人除け者にされてゐますから、めつたに口を利いたこともありませんが、顔と名前とだけは、お互ひによく知つて居るのでした。

初子には親もなく家もありません。小さい時に兩親にわかれて、今は澁谷の親類に預けられてゐるのです。たつた一人の弟の龍ちゃんは、深川の叔母さんの家に預けられてゐるといふこと。……姉の初子のために、龍ちゃんが深川から、お正月に着る着物を持つて來てやつたのだといふことが、はじめに解りました。

『ほんとに龍ちゃんは感心ねえ、姉さんに遇つて嬉しいでせう。』
 と、小枝子と言ふと、龍ちゃんはにこ／＼しながら、
 『僕ほんとに早く解つてよかつた、姉さんも嬉しいだらう。着物の帯だの
 持つて来たんだよ。』
 と、脊中の大きな包みを揺つて見せました。
 初子の眼には、涙が一ぱいたまつてゐました。小枝子は別れる時に、
 『初子さん、お正月には遊びにいらっしやいね。ちやア左様なら。』
 と、親切言つてに挨拶をしました。而して、初子と龍ちゃんとが嬉しさうに
 寄り添うて話しながら、澁谷の方へと急ぎ行く後姿を、見えずなるまで見
 送りました。

母の肩掛

一

『もう今日限りね、明日からお休み、嬉しいわ。』
 『学校がお休みになると、もうお正月のやうなものね。』
 『さうよ、私なんか明日から羽子ついて遊ぶの。』
 『私だつて、もう羽子もリボンも買つていたゝいたわ。』
 『私ね、明後日の晩に、お母様やお姉さまと銀座へ行くのよ、而して肩掛と
 空氣草履とを買つて貰ふの。』

「貴美子さんもお草履？ 私もよ、新しい靴があるんだけど、お正月には草履を買っていたんだけど。」

「紅い鼻緒のてせう、あなたのお好きな、好いわねえ、ほんとにお正月が待ち遠しい。」

今し、お晝の休み時間に、校庭の片隅で四五人の少女が、楽しいお正月の話をはじめました。明日から冬休みになるといふので、学校の内にも外にも、何となくあわたししい気が満ちて居ります。

「貴美子さんは靴が一等よく似合つてよ、姿勢が好いんですもの。」

「あら厭だ、御自分こそハイカラスタイルの癖に、立矢の字のおみ帯に紅緒の草履、ほんとに繪に描いたやうだわ。」

「ぢやア貴女、スケッチして頂だいな。」

「オホ、、、私の筆ぢやア駄目よ。」

「でも好いわ。」

「でも好いわなんて、随分ねえ。」

「あら、御免なさい。ぢやアどうぞ！」

「オホ、、、今ぢやないことよ。」

「随分気が早いね、オホ、、、。」

と、一しきり華やかな笑ひ聲が起りました。

照子は、その樂しさを會話を聞きながら、黄ばんだ葉がヒラ／＼と散るポプラの樹にもたれて、忙しく編棒を運ばせてゐました。

照子の耳には新しい靴だの空氣草履だのリボンだのといふ言葉が、羨ましく響きました。同じ十四の少女の身に、同じやうに楽しいお正月が音づれく來るのに、照子はまだその支度を考へることさへ出來ないのでした。洗ひ張りをした着物に、たつた一枚しか無い紡績の羽織を着るのに、紅緒の草履はふさはしくない、やつぱり穿き慣れた駒下駄で、さびしいお正月を迎へねばならぬ。と思ふと照子は、われ知らず悲しい氣がするのでした。

ふと、編物の手を休めて顔をあげた時、今まで賑やかに話してゐた貴美子が、

「あら、照子さん、照子さん、いらつしやいな。もう今日だけぢやありませんか、みんなでお話しませう。」

と、此方に向けて手招きしました。他の少女達も言ひ合せたやうに、

「照子さん、入らつしやいよ。今ね、貴美子さんのハイカラスタイルに繪のやうな芳子さんだつて、そりやア面白いお話がはじまつてるの。」

「だから、あなたも此方へ來て、早くほめてあげて頂戴な。」

と、さも親しさに申しました。照子は斯う呼びかけられて、返事をしない譯にも行かないので、すゝまぬながらも身を起しました。

「あのね照子さん、皆で私を苛めて仕様がな、貴女加勢して頂戴な。」

『いちめやしないのよ、美貴子さんのスタイルが好いつて言つてるんぢやありませんか。』

『御自分だつて、お正月にやア随分氣取らうと思つてるんぢやアないの。』

『あら、氣取るのは鈴子さんよ、氣取り屋の本家本元ですもの。』

『オホ、、、氣取らなくつちやア損だつて。』

『お正月の氣取り初め！ おめでたう。』

『ほんとにおめでたう！ オホ、、、。』

『今からお稽古しとくと好いわ。』

『それには及ばないのよ、氣取ることはもう三年も前に卒業なんですつて、ほんとにおめでたいわ。オホ、、、。』

またしても皆が一樣に笑ひ騒ぐので、おとなしい照子は、口を出すことも出来ませんでした。

三

きれいな春着は出来なくても、お正月を迎へるといふことは、さすがに照子も嬉しいと思ひました。

門松、羽子、カルタ、すごろく——そんなことを次々に想ひやりますと、さびしい照子の顔にも、美しい笑みが湛へられました。けれどもまた、貧しい自分の家のことや、ながい病氣に瘦せ衰へていらつしやるお母様のことなどを胸に浮べますと、斯うしては居られないやうな氣もするのでした。

學校がお休みになつて、お友だちは皆、朝から羽子をついて遊んだり、日本橋の方へ買ひ物に行つたりする日を、照子は暗い家の中で、お母様の看病をしながら、その閑々に相變らず編棒を動かして居りました。

貧しい家で、さゝやかな支度をするのでも、照子は可なり忙しい思ひをいたしました。自分のものと言つては、何一つ買ふことも出来ず、たゞ『お正月』といふ名を樂しみに、何か知ら待たれるやうな氣もちで、まめくしく立ち働きました。

あけて正月元日の朝——照子は笑顔でお母様の前に座つて、

『お母様、お正月おめでたう！ さあこれを掛けて下さい、暖かてせう。』

と言ひながら、誠心こめて編んだ毛糸の肩掛を、お母様の首から肩に掛けま

した。

『お、お、こりやアほんとに暖かさうだ、よく出来たねえ。私が掛けるのは惜しいやうだけれど。……有り難いねえ。』

と、お母様がお喜びになるのを見ると、照子は自分がきれいな着物を着たよりも、なほ嬉しく感じました。

やがて、お友だちは見違へるほど美しく装うて、三々五々、光のどけき新玉の街へと押し出しました。けれども照子は、それを羨ましいとも思はず、縫ひ直しの着物に紡績の羽織を着て、母の笑顔を見返りがちに、いそぐと年始の式に出かけました。

希望の光

「貴女、學校はどちらですの？」

斯う言つて尋ねられる毎に、濱子は何だか恥かしめられるやうな氣がして、消えも入りたいたいと思ふのでした。

「私、學校へは參つて居りませんの。」

「あら、さうですか、もう御卒業なんですね。それぢやアお家の御用がお忙しいでせう。」

もう學校を卒業した年頃とも見られるのでせう、自分ではまだ子供のつもりで居りますけれど、口の利きやうから身のとりにしが、どうしても華やか

な學校時代の少女とは思はれません。

「忙しいッてこともありませんけれど、なんにも出来ないんですから……。」
と、なるべく當り障りのないやうな答をして、濱子は不安心ながら、いつもその場を繕つておくのでした。

後から考へると、なぜあの時に思ひ切つて、事實をありのままに言つてしまはなかつたのだらう、隠したとて何時まで隠せるものではないのに、と自分で自分の弱い心を責めずにはゐられません。けれども、やつぱりその時になると、何となく氣おくれがして、忍べるだけ忍びたいやうな、心にもないことを言はねばならぬのでした。

もとより濱子は人を欺かうといふやうな、そんな卑しい考へを浮べたこと

はありませぬ。出来ることなら、何もかも正直に言つてしまひたい、誤解されて苦しい思ひをするよりも、はじめから事實を言つてしまへば、恥かしいのはたゞ一時のこと、笑ふものには笑はせて、今度誰かに問はれたら、その時こそさつと言ひませう、と獨りて小さな心を痛めることが度々ありました。同じ年頃の少女が、派出な着物に短い袴をはいて、何の心配もなさうに、靴音軽く都大路をあるいてゐるのを見ますと、濱子は羨ましいやうな嫉ましいやうな、たゞもう自分が肩をならべては居られない氣がするのでした。『袴は穿いてゐるけれど、風呂敷包みは持つてゐるけれど……私は學校の生徒ぢやない。』と、自分から卑下して、誰に遠慮もいらぬ筈の公道をあるくのでさへ、なる

べく軒下の暗い所を選つて通るやうにしました。電車に乗るのでも、朝の八時ごろ、午後の三時ごろ、學校生徒の行き復り繁き時刻には、もしや知つたお友だちに遇つて、ぢろく／＼と顔を見られはしないかと、さゝやかなことにまで氣を兼ねて、人かげに隠れるやうに小さくなつてゐました。『日本〇〇株式會社』と白い表札の掛けられた煉瓦の門を出て、賑やかな大通りを右に、かしましい電車の響きを聞きながら、濱子は今日も寂しい心で、灯ともし頃を家路に向ひました。とある横町を曲りますと、左側の三軒目のお米屋から、十二三歳のいたいけな少女が出て來ました。今に雪でも降りさうな寒い夕ぐれなのに、少女は

羽織も着ず足袋も穿かず、薄よごれた飛白の綿入を身につけて、片手にはメリケン粉の袋の巾でこしらへた小さな袋を持つてゐました。お米屋から出て来たところを見ますと、おほかた今夜喰べるものを買つてゐるのでせう。濱子は譯もなくその少女が可哀さうになつて、

『寒いのねえ。』

と、思はず寄り添うて聲をかけました。少女は驚いたやうに、濱子の顔を見上げましたが、すぐににっこりとして、

『え、寒いわねえ。』

と、すゞやかな聲で答へました。

『お使ひにいらしたの。』

『えい、これからまた八百屋と漬物屋とに寄るのよ。』

『さう、お小さいのに感心ねえ。よく買ひ物が出来て。』

『私、いつでもなのよ。』

と、少女は恥かしがりもせず、馴れ／＼しげに口を利きました。濱子は、なほさらなつかしいやうな氣がして、

『お母さんに褒められるてせう。』

と言ふと、少女はまた一寸濱子の顔を見上げて、にっこりしながら、

『今日は私、褒められたのよ。』

『さう、どうして?』

『どうしてって、お給金を貰つて来たんですもの。だから私、嬉しくって、』

買ひ物に來たの。』

と、右の手にさげてゐた小さい袋を、思ひ出したやうに左の手に持ちかへました。

『お金を貰つてらしたの、まあ感心ねえ、ぢやア貴女はよく働くのね。』

『働くツていふ譯ぢやアないのよ、毎日工場へ行くだけなの。』

『工場へ？ まあほんとに感心ねえ。』

『仕方がないんですもの。……あら、私お話ばかりしてゐたもんだから、こんな所へ來てしまつた、八百屋は向ふの通りだわ。ぢやア左様なら。』

と、立ち止まつて挨拶しました。濱子も歩みを止めて、

『あら、そつちへ入らッしやるの？ ぢやア左様なら。』

と、少女の後姿を見送りました。

もう一度此方を振り返つた少女は、

『左様なら……』

と、小腰をかゞめて、またスタ／＼と宵の町にかくれてしまひました。

別れてから濱子は、あのいたいけな少女の身の上を、つく／＼と思ひめぐらして見ました。まだ年も行かないのに、もうお給金を取るといふてはないか。この寒いのにあんな薄着をして、それで不満足とも思はず、お金を貰つて來た嬉しさに、いそ／＼と買ひ物に出でゐるてはないか、家には母が待つて居るのだらう、父は病氣ではあるまいか。——あゝ、あの少女に比べたら、と濱子は端なくも温かい感じを浮べました。

『私は會社に勤めてゐる身。……學校の生徒ぢやアない、けれど、けれど、何が恥かしいものか。』
と思つて顔をあげますと、日はもう全く暮れてゐるのに、何だかあたりが明るくなつたやうな氣がしました。濱子の胸には、新らしい希望の光がひらめいたのでせう。

少女家庭物語 終

明治四十五年四月廿五日印刷
明治四十五年五月 壹 日發行

少女家庭物語 全一册

定價金五拾錢

著者 沼田 藤次

發行者 田沼 秀夫

印刷者 飯田 三千太郎

東京市神田區南乘物町七番地
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



發行所

東京市神田區南乘物町七番地
電話番號本局四六二四番
振替貯金口座東京第六九九番

誠文館

關西大賣捌

大阪市東區備後町四丁目 吉岡寶文館
大阪市北區東梅田町 盛文館

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所株式會社 秀英舍第一工場

誠文館圖書大賣所

東京市神田表神保町	東京堂書店	久留米市米屋町	菊竹金文堂
全 日本橋本石町三	至誠堂書店	熊本市新町二丁目	長崎次郎
全 日本橋數寄屋町	林六合館	和歌山市新通	宮井宗兵衛
全 京橋元數寄屋町	北隆館書店	仙臺市大町	藤原金港堂
全 京橋尾張町	東海堂書店	長岡市表四之町	目黒十郎
神戸市元町五丁目	吉岡寶文館支店	長野市大門町	西澤喜太郎
京都市二條河原町	寶文館	前橋市曲輪町	煥乎堂本店
名古屋本町三丁目	川瀨書店	弘前市土手町	今本店
名古屋玉屋町三	星野書店	清國大連大山通	大阪屋號書店

◎其他全國各地著名書籍雜誌店◎

趣味と實益とを兼備せる寶典

三輪田眞佐子先生下田次郎先生序文
 巖谷小波先生 沼田笠峰先生共編

最新日本少女寶典

三六版 總一册
 紙美本全 布一册
 紙數七本 圖百餘頁
 特價金壹圓貳拾錢
 郵稅金拾貳錢

(内容見本進呈往復は
 がきにて御申込あれ)

◎口繪 極彩色石版刷、三色版、寫眞版等數葉
 ◎挿畫 木版彫刻密畫、寫眞銅版等數百個挿入
 ◎裝釘 總クローズ金文字、彩畫、頗優美上製

此の書は少女が日常心がくべき事を始めとして、各種の學科、技藝、娛樂、其の他少女に關するあらゆる事項が收めてありますから、學校にある方と、家庭にある方とを問はず、少女の座右に一日もなくてはならぬ寶典であります。文章は解り易く、二先生が口づから話すやうな書き振りで、趣味多く又製本の體裁も非常に高尚優美ですから、お嬢さん方の書齋や机上の裝飾品としても眞に立派な本であります。

發行所

東京市神田區南乘物町
 振曆口座東京六九九番

誠文館

趣味津津たる少女の好讀物

巖谷小波先生作 山村耕花君畫 (好評噴々如湧)

少女對話選

四六判 頗美裝
定價金 八拾錢
郵税金 八錢

少女世界評 少女對話は巖谷先生獨特の作であります。その輕妙なる、そのウキツトに富める、その無邪氣にして而も何等かの諷刺を含める、あらゆる點に於て、他の模倣をゆるさないものであります。本書には、先生の作品中で特にすぐれたもの、即ち『新入生』『ホームシック』『そら病』『留守番』『仲よし』『考へ物』にせ幽靈の七篇が收められてあります。裝幀及挿畫は山村耕花氏の筆、頗るきれいな書物です。少女の會話修練のため、はた社交の豫習のために極めて、適當なる讀みものと信じます。

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

春の夜の好讀物

沼田笠峰先生新著 山村耕花君畫 (好評忽再版)

少女十二物語

三六版 彩色石形頗美裝
定價版彩色石形頗美裝
郵税金 五拾錢

少女世界評 此の書は、少女の心もちを描いた作ばかりを輯めたもので、その名の通り十二篇の物語があります。少女の心理を描くことは、著者が最も得意とする所で、なづかしい少女時代の思ひ出もあれば、やるせない心のなやみもあり、新しい希望もあり、美しい友情もあつて、とりくに少女の心をそゝります。殊に『ピアノの蔭』、『燕の巢』、『窓の少女』などは、最もよく現代少女の心を捉へ得た作だと思はれます。表紙、口繪、挿繪十二葉、ともに山村耕花氏の筆、でこれまた新しい少女の趣好に適する描きぶりであり、家庭の讀みものとして、少女にふさはしい良書であります。

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

趣味と教訓とに満ちたる物語

沼田笠峰先生新著 山村耕花君畫

(最新刊發賣)

少女家庭物語

三六版形頗美裝
定價彩色版
郵稅金五六十錢

愛する少女諸子よ、諸子は樂しき家庭團欒の席で、趣味あるお話を聞きたいとは望みませんか。父母弟妹とも、平和な空氣に酔ひながら、互ひに清いお話を語り合つたら、どんなに愉快なことでせう。この書は、即ち家庭に於ける優しい少女の物語を集めたものです。家庭の花、平和の光と稱へられる少女諸子は、この書を座右に備へて、かがやく團欒に一しほの興を添へ給へ!!! (著者より)

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

近く現らはれんとする少女の好讀物

沼田笠峰先生新著 河合英忠君畫

少女歴史物語

三六版形頗美裝
彩色石版口繪挿畫
印刷中近刊

この書は少女のために、日本歴史の大要と名高い婦人の美談とを、趣味ある筆でわかりやすく記したものであります。讀んで面白いと同時に、學科の参考にもなり、精神の修養にもなります。お話の好きな少女方は、この有益な書物を座右に備へて愛讀せねばなりません。

發行所

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

巖谷小波先生序
西川芳溪先生作

荒川五郎先生序
黑崎修齋君畫

(新刊大好評)

少年 お伽花たば

四六版 頗美裝
定價金 四拾錢
郵税金 六錢

巖谷小波先生の序文にも『君は關西のお伽大家なり』とあります。其の作者が十年間に作った物の中から最も面白いものを選び抜いて集めたのが此の『お伽花たば』です。少年向きの活潑な角力取草や少女向きの可憐な葦草と名のつく様な、花色々を色系で束ねた様な數十種のお伽噺の其面白さは慥かに少年少女の手を離されぬ讀物でせう。

發 兌 元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠 文 館

春の夜の好讀物

小野小峽先生著 川端龍子君畫

(好評噴々如潮)

お伽物語 少女フラワー

四六版美本全壹冊
定價金 三拾五錢
都税金 四錢

朝に憧憬と微笑にみち、夕べに暮れゆく窓によつて獨り泣く少女よ。一度は此の書を手にして下さい。著者の柔らかな感情と、温い同情と、限りなき憧憬とに包まれた少女作品。一は可憐にして、一は美はしく、お伽小品併せて十餘篇。何れもみな少女春の夜の好讀物!

發 兌 元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠 文 館

沼田 笠峰先生序
溝口 白羊先生編

(新刊好評噴々)

少女模範文集

四六版美本全壹冊
定價金參拾五錢
郵稅金六錢

少女世界、少女等有力なる少女雜誌の作文欄を通じて誌上の花と唱はる、少女媛約二百名の作を選んだものです。どの文にも皆、華やかな少女の香ひと、若き心の誇とが充滿ちてゐます最も新らしい、最も美しい作文のお手本としてこの本よりよいものは外にありません。文章の上手にならうと思ふ人は、是非此本を見なければなりません。

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

溝口 白羊先生編

(最新刊發賣)

續少女模範文集

四六版美本全一冊
定價金三十五錢
郵稅金六錢

新しい佳い文章を作らうと思つたら、どうしても新しい善いお手本に就かねばなりません。此「續少女模範文集」は、方々の少女雜誌の中から模範とすべき優等の文ばかりを選んだものですから、少女方の作文のお稽古には、最も適當した本であります。前の「少女模範文集」が、羽の生へた様に盛んに賣れて行つたのを見ても、此等の本が、どんなに皆様に歓迎されて居るか分るてせう。

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

巖谷小波先生選

(現代有名畫伯挿畫)

通俗教育 お伽講談

菊判美本每卷讀切
定價壹冊金拾貳錢
郵稅各金四錢

家庭夜話の絶好資料

▲第壹編……偉人東郷大將……黑崎修齋君畫
▲第二編……幼時の伊藤公……宮川春汀君畫

巖谷小波先生の序に曰く……細川のをぢさんは、新講談の名人であります、今までは、おもに大人ばかりを前に置いてさかんに面白がらせて居りましたが、今度感ずる所あつて、進んで子供衆をも喜ばせやうと新たに『お伽講談』と云ふものをはじめました、それはまことに結構なことで、私は子供衆を代表して、大いに賛成したのであります、(下略)……と。

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館

巖谷小波先生序

(大好評忽再版)

一讀興湧再讀痛快

通俗教育 家庭講談

袖珍總布製
定價金三拾錢
郵稅金四錢

第壹卷……やつ、こ内藏様……附 俠商利兵衛……全壹冊 (讀切)

大阪日報評 風谷君が伊藤痴遊と相對立し新派講談家として異曲同巧の妙を擅す、しつゝあることは世人の熟知する所なるが、本篇は池田輝政が父の仇永井傳八郎に對し怨みに酬ゆるに恩を以てせる逸話と、輝政の子孫やつこの内藏事一心齋が傳八郎の子孫永井信濃守の小姓根岸某に對し怨に酬ゆる徳を以てせる逸話を『心機一轉』と題し面白く口述し附録として俠商天野屋利兵衛の義烈なる事蹟を加へしもの武士道的の近來趣味ある好讀物也

發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠文館



絶好の維新史料



遞信大臣 伯爵林 董閣下題辭
故樞密顧問官 男爵大鳥圭介閣下述

(空前の珍書)

幕末實戰史

上製頗美本全一冊
コロタイプ版肖像眞蹟挿入
定價壹圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

東京日々新聞評

維新革命の敗戦者たる大鳥男が同志と共に東北の山河に於て革命の勝利たる薩長の官兵と血戦し轉じて函館に入り一種變形の共和國を作らせし海陸より攻撃せし官軍と縦横奮戦し刀折れ矢盡くる迄徳川氏の爲に日本男兒の瘠せ我慢心を最大限に發揮し遂に男及び榎本武揚、松平太郎、荒井郁之助の四氏が官軍の軍門に降り残れ六日に至る獄中に於て起草せし南柯紀行と名づけし男が惨風暴雨の實戦日記を主として其特赦を蒙りし五年一月りりしかば同志の偶然差入れの羊羹の中此書なり、男の語れる緒言に當時の獄法として筆紙の携帶を許されざりし居りしに「偶然差入れの羊羹の中此書なり」と記したるが此日記である」と一節は以て此書が幕府衰亡の血たり憶し居りしに「偶然差入れの羊羹の中此書なり」と記したるが此日記である」と一節は以て此書が幕府衰亡の血たり涙たる性質を察するに餘あり(下略)

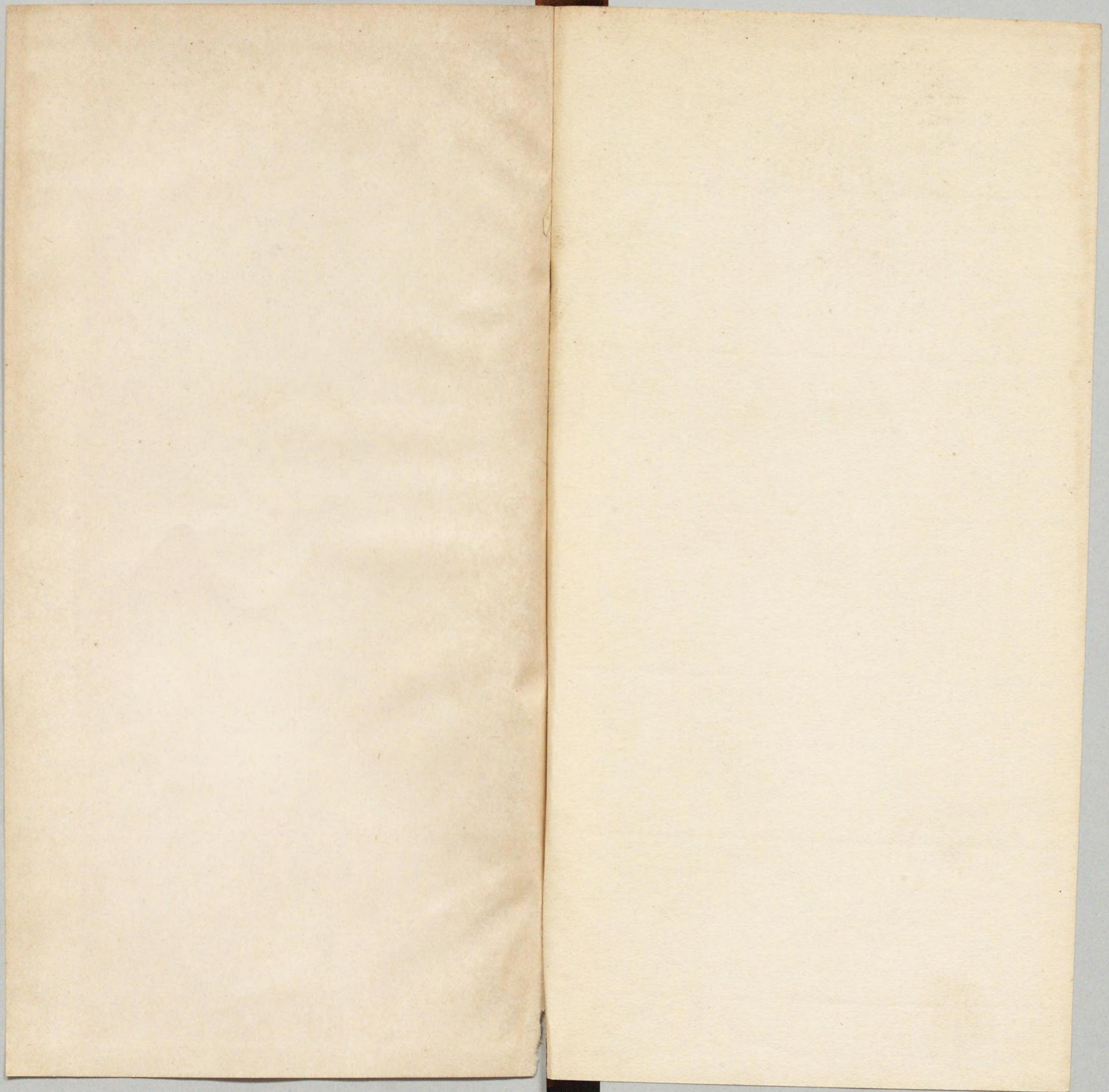
發兌元

東京市神田區南乗物町
振替口座東京六九九番

誠

文

館



269

151

特52-660



1200500907156

